

---

# 超能力者コナン

きのこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超能力者コナン

### 【Nコード】

N1320N

### 【作者名】

きのこ

### 【あらすじ】

ある日コナンは事故に遭い、心肺停止に陥った。息を吹き返し、意識を取り戻したコナンだったが、幸か不幸かアンサーカーという能力を手に入れていた。その能力を使い、仲間と共に黒の組織破滅へと向かうコナンだったが…。

金色のガッシュからは『アンサーカー』とその設定しか出てきません。

## プロローグ

こ、ここは…。病院か。

朦朧とする意識の中、体中の激しい痛みで目が覚めた。  
ゆっくりと目を開らく。

周りは暗かったが、ここは病院の中だとすぐにわかった。  
オレはそのとき、

『何故病院だとわかったか』

そんなこと気にもとめていなかった。

ただ、空気やうつすらと見える周りのもので、病院の中だとわかったのだろう。そう思っていた。

目を開ける前からわかっていたのに…。

少し考えた瞬間その答えが出てきていたのに…。

その時はまだ、自分の中に超能力という名の新たな『力』が目覚めたことに、気がついていなかった…。

## プロローグ（後書き）

初めまして！きのこです

初投稿の駄文ですが、続きも読んで頂けると嬉しいです！！  
感想、評価、ダメだしなど、お願いします！！

## 始まりは雨の日 part 1

「ごめんね、コナン君。

こんな天気の日に買い物手伝わせちゃって。」

もうすぐ梅雨のせいかな、今日は朝から凄い雨。

オレは蘭と二人で近くのスーパーに買い物に行き、今はその帰り道。

「蘭姉ちゃんが謝る事じゃないよ。

僕が勝手について来ただけなんだから。」

「優しいのね。でも、コナン君が来てくれて助かった。」

こんなに沢山買ってこいなんて、酷いもんよね。

そんなに必要なんだったら、自分で買いに行けばいいのに。」

蘭が口調を強め、愚痴をこぼしている。

その相手は、言わずと知れた名探偵、いや、迷探偵の蘭の父、毛利小五郎だ。

オレが居候させてもらっているのは小五郎のおかげ。

蘭の意見はもつともだと思っただ、ただ、はははっただけ笑った。

オレと蘭が買い物に来た理由…

それは、おっちゃんの我が儘だった。

「おい、もう酒がねえじゃねえか。

つまみももうねえぞ。蘭、買ってこい。」

最近依頼が全く来ない上、おっちゃんが大好きな沖野ヨーコが急に活動を休止したため、さらに酒に入り浸った生活が始まっていた。

蘭もおっちゃんの体を心配してはいるが、ああ言い出したらまるで駄々っ子のようにいつまでも言い続ける父親を見かねて、買いに行くことにしたのだ。

蘭が、ビールとおつまみ買ってくればいいのねと言い、探偵事務所を出ようとすると、

「ビールは箱で10個買つてこい。

んでつまみは買える分だけ買つてこい。」

勿論蘭は、はあ！？となるわけで…。

おっちゃんはおっちゃんて何故かポアロに行くし…。

それに今日は13日の金曜日。怒ってる蘭を一人で行かせて何かあったら大変だし、荷物をひとりで持つのも大変だろうと思い、オレも買い物を手伝うことにした。

## 始まりは雨の日 part 1 (後書き)

こんにちは！きのこです

時間があったので投稿しました！

？「もずく」

なんだか終わり方が、中途半端ですよね…。

？「もずく！」

次のと、その次の話で「始まりは雨の日」は終わります。3つで1

つなので中途半端なのはお許しくださいm(´`´´) m

？「も・ず・く！」

感想、評価、ダメだし、そして次回もよろしく願いします！！！！

？「もずくは世界を救うんだよ」

## 始まりは雨の日 part 2

オレと蘭は買い物を終え、今は帰る途中。  
信号を待っている。

蘭の機嫌は買い物をしているうちに直ってくれたのだが…

「そうだ。今日の夕食はコナン君の好きなハンバーグよ！  
せっかく買い物に行ったから、お肉とか買って来ちゃった」

機嫌がよくなりすぎて、言われたものだけでさえ荷物が多いのに、  
別の物まで買ったようだ。

半分は別に好きじゃねーよと思い、もう半分はよく買うなと呆れな  
がら、

「本当？ありがとう、蘭ねえちゃん」

と子どもの演技で答えた。

その時、信号が青に変わった。

信号を待っていたのは俺たちだけだったようだ。

周りに渡ろうとしている人はいない。



歩き出した時、少しだけ雨が強くなった気がした。

## 始まりは雨の日 part2（後書き）

こんにちは〜！きのことです

？「もずく〜」

今回、短いですよね…。気にしないで頂けたら幸いです。

「もずく〜！もずく〜！」

では、突然ですが前回から耳障り目障りな物体の紹介します。

？「わーい！！」

鈍感でただうるさいだけのこれは

？「うるさいっ」

友達のまゆげさんです！！

まゆげ？「まゆげじゃない！怒るよ？」

どうぞご自由に。

本当はまゆってさんですがどうでもいいですよ〜

まゆって「良くない！」

感想、評価、ダメだしなどよろしく願います

まゆって「次もよろしくね〜」

### 始まりは雨の日    p e r t 3

「雨、強くなったね。」

「そうね…、風もでてきたしね。少し急いで帰ろっか」  
蘭はそう言っと、早足になった。

オレも蘭に追いつこうと早足になりかけた。

その時、赤信号の方から、一台の車が走って来ているのが見えた。  
スピードはだいぶでている。

これだと蘭のいるあたりに……

蘭が引かれる！……！  
そう思った瞬間、オレは走り出していた。

間に合ってくれ。

蘭、蘭、蘭、

「らーんっ！……！」

ドンッ

オレは思いつきり蘭を突き飛ばした。

蘭はなんとか安全なところに行っただが、  
オレはその勢いで転び、車の目の前に来てしまった。

「コナン君っ!!」

蘭が呼ぶ声がする。

よかった。蘭は無事だ。

でもオレは…。

ごめん。蘭。

ドンッ

さっきよりも大きな鈍い音がした。

それが聞こえたと思ったら、

目の前が真っ暗になった。

## 始まりは雨の日    p e r t 3 (後書き)

こんにちは〜!きのことです

まゆつて「もずくです」

久しぶりの投稿です。待っていて下さった方、

まゆつて「いるの?」

長らくお待たせいたしました!これから本題に入り始めます

でも、また長らくお待たせすることになりそうですが、そこんとこよろしくです。

まゆつて「なんで?」

宿題が・・・・・・・・・・

まゆつて「See you again next time」

家に帰ると…

「ただいまあって、和葉ちゃんに服部君！？どうしたの？」

私ที่บ้านに着くと、和葉ちゃんと服部君が椅子に座っていた。

「この平次のアホがな、どうしてもコナン君に会いたいって言うから連れてきたん。

せやけど病院の名前聞いてなかったから、聞こうと思って、蘭ちゃん家来たんや」

「そついうこつちゃ。病院、どこや？」

コナン君のお見舞いか。

でも服部君にしては遅かったよね。  
連絡したの、ちょうど一週間前だし。

「オレはすぐにも来たかったんやけど…」

テスト前やから行くなってオカンとこのアホがつる…」

「平次の成績心配して言うてんのになんや、その言い方は！」

「オレはく…やのうてコ、コナン君のことが心配だったからはよ来たかっただけや！」

2人がいつもどおり、仲良く言い合いをしている。

いつもと変わらないわね。

一緒にいるだけで落ち込んだ気分が少し晴れた気がする。

「米花中央総合病院だけど…私もこれから行くから一緒に行く?」

「蘭ちゃんも行くん?アタシに行ったことないからたすかるわ」

「じゃあ、準備してくるからちょっと待ってって」

階段を上がって、自分の部屋に行ってから荷物を置く。

次に、コナン君の部屋に行って、着替えなどをかばんに詰める。  
それだけのことなのに、なぜか手が震えている。

いつもそう。コナン君のことを少しでも考えると体が震えて胸が押しつぶされそうになる。

準備がやっとのことで整のうと、3人で米花中央総合病院に向かった。

家に帰ると…（後書き）

お久しぶりですー！！

ネーミングセンスがなくて文章を書く能力もなく、夏休みの宿題が  
終わってないきのこです ついでにタイピングも遅い…。

コナン「…学校っていつからだ？」

まゆって「九月一日から」

ついでに今日は九月三日だよ！

コナン「夏休み終わってんじゃないか！」

提出期限に間に合えばいいんだよ。自由研究だって一昨日やったし  
コナン「それって…」

ではまた次回ノシ



## アンサーカーの説明&雑談（前書き）

登場するのはコナンと哀ちゃんの2人です。

## アンサートーカーの説明&雑談

今回は雑談しながらアンサートーカーの説明をしたいと思います！  
本編とは全く関係ないのでどうでもいい人はスルーして下さい！

「こんな放置しててやっと更新かと思ったら雑談とはな…。」  
「ごめんなさい…。」

「てか一話分使う必要あんのかよ？」  
「必要はないけど…」

「工藤君、この作者に理由なんて求めちゃだめよ。気分で動いてるんだから。」

「哀ちゃん…。当たってるよ？当たってるんだけどなんか酷くない？」

「そんなことよりさっさと説明しろよ。」

「あ、はい。」

「じゃあ、コナン君、アンサートーカーとはどんな能力だと思いますか？」

「そのまんま『答えを出す者』じゃねーの？」

「大正解！！」

「バカにしてんのかよ。」

「バカにしてるのよ。」

「違うよ！哀ちゃんまで何言ってるの！！」

「それ以外考えられないじゃない。」  
違うつて!!

「なら何なんだよ?」  
ただ…、なんとなく…。

「工藤君、だから」  
「わかってただんだけどここまでとは思わなかったんだよ。」

2人とも酷い…。まあよくないけどいいや。先進むよ?

アンサートーカーは、その名のとおり『答えを出す者』という意味  
なのですが、答えが出ないものもあるのです。哀ちゃん、何か分か  
る?

「そんなこと知るわけじゃない。」  
だよね…。

たしか、原作では人の心情とかその考えに至った過程とか涙の理由  
とかだったはずだよ。あと、『解なし』もあつた!

「解なし?」  
答えがないんだつて。

たしかシン・クリア・セウノウス(技の名前)を倒しちゃいけない  
ことは分かるんだけど、倒さなかったら自分たちが消されるし…で、  
答えがなかったんだよ(金色のガッシュ33巻)。  
まあ解なしつては表現してないけどね。

んで、その能力はもとから持ってたか、「一度死んで生き返ったら

何かあった」のどつちかでしか手に入れられないんだよ。

だからコナンが一回心臓止まったってのは設定だけだから安心して  
「設定だけってなあ…。まあよかったけど…。」

でも、一回死んでからのほうだと、何日かしたら面白くない夢を見て、  
脳がその能力を本当の危機にしか目覚めないように隠しちゃうんだ  
よね。

「それで、どんな夢なのかしら？」

えっと…、サンビームさんが妖精になって、ブラゴが笑いながらお  
手玉して、何人もの魔物にアホ足りないからお置きされて、最後  
にえっちらオットセイするんだよ（金色のガッシュ29巻）。

「全然わかんねーんだけど。」

だから、哀ちゃんがすごいフリフリのついたロリータ着て、いか  
にも当たり前な感じで出てきたり、他には…、まあ、とにかくそん  
な感じだよ。

「最初からそう言えよ。」

「そんなたとえ使わないでもらえないかしら。」

怒ってますね…。

でも、哀ちゃん似合いそうだけどな。もとかかわいいし。

「何？殺されたいのかしら？」

苦しまない方法ならお願いします。

「おいおい…」

「何冗談を真に受けてるのよ。」

えっ？冗談だったの？

「『えっ』じゃねーよ…。」

「何考えてるのよ…。」

この先の話をどう進めようかと…

「もういいわ…。」

？

それと、「夢を見て危機の時しか…」のあたりの設定は変える予定です。

長くなりましたが、説明はこのくらいです。

これからもよろしくです。ではノシ

## 病院の中で part 1

「ここが、コナン君の病室。」

そう言いつと、毛利の姉ちゃんは『572』と書かれた部屋の前で足を止めた。

ガラガラガラッ

戸を開けると、中は意外に広かった。

ベッドは一つだけやから個室。

そのベッドの上に工藤が寝ておる。

「コナン君…、まだ起きてないみたいね…。  
じゃあ私は、お医者さんと話してくるわね。」

「アタシも蘭ちゃんと一緒に行ってくるわ。」

「おう。わかったわ。」

そう言いつと2人はすぐに病室を出ていきおった。

2人は工藤の見舞いに来たとちゃうんか？  
まあええわ。

「あなたの言った通りね。」

へ？ど、どこから声が…？

「だろ？」

さ、さっきまで寝とつたはずの工藤が目開けて口開けて…

話しとる！？

「それに、こつちも。」

あの声はちっこい姉ちゃん…？

つて、ベットの影から出てきてこつち向いて…。

？？？

「工藤、起きてたんか？それに、ちっこい姉ちゃんも何で…？」

「あら、私がいちゃいけないのかしら？」

そういう意味じゃのうて…

「オレが呼んだんだよ。聞きたいことがあつて。」

伏し目がちに言う工藤。

？

何や？聞きたいことって。

って、そういえば工藤寝たふりしとったんか！？  
寝たふりやのうて、意識戻ってへんふりか…。

オレは軽く頭を働かせる。

『オレが呼んだ』ちゆうことは、とつくに目え覚めてたんか？  
毛利の姉ちゃんは一藤が起きてること知ってへんようやったし…。  
てことは…。

状況が見えてきたけど、工藤は何考えとんねん。  
そんなこと隠して何したいん。

こら問いただす必要がありそうやのお。

「何考えてるん。教えろや！工藤！！」

この時オレは、ここが病院の中うちゆうことをちゃんと覚えとった。



病院の中で part 1（後書き）

えつと…、大変お久しぶりです…！

「『大変お久しぶりです』じゃねーだろ！」

ごめんなさい…。

「待たせすぎにも程があるわね。」

ごめんなさい…。

「連載始めたからにはちゃんと更新してくださいよ。」

ごめんなさい。

「待つてる間に、うな重何杯も食えるぞ！」

ごめんなさ…

「待ちくたびれて、首が長くなっちゃうよ？」

ごめんなさい？

とりあえず、大変お待たせして申し訳御座いません。

「とか言いながら、言い訳は腐るほどあるんだろ？」

うん。一番得意なことは言い訳と口から出任せだからね

「使うところじゃないんじゃないの？」

はい。そのとおりで御座います。

できるだけ早く更新するようにしますので今後とも

よろしくお願い致しますm（　　）m

## 病院の中で part 2

「教えろや！工藤！！」

そう言う服部の口調が、少し強くなった。

少しじゃねーかもな。

怒らせちまったか？

当たり前だよな…。

「何考えてるかだよな。それはさっきも言ったとおり灰原に聞いた  
いことがあって…」

「んなこと聞きたいんちゃうわ。毛利の姉ちゃんまでにも隠しとる  
理由を聞いとるんや！」

えつと…こ、これって言わなきゃダメなのか？

「何やねん、工藤！早よ言えや！！」

今度は怒鳴り気味で言う服部。  
なんとか誤魔化せねえか…。

「色黒の探偵さん、ここ、どこだかわかっているのかしら？」  
灰原が肩をすくめ、いかにも飽きれているといった感じで服部に聞  
く。

「ここ病院やったんや。忘れとったわ」

服部、それ絶対嘘だろ…。言い方が嘘っぽいぞ。

でも灰原、ナイス！このまま話をそらせば…

「で、工藤、じらさんで早よ言えや。」

さつきよりも口調がずっと優しくなった。

でも、もう言うしかないのか…！？

「私もまだその理由は聞いてないわ。言いたくないんじゃないのかしら？」

大体予想はつくけど」

灰原…！？なんか今日やけに優しくねーか？

でも予想がつくって…

「優しいと思ったのはあなたの勘違い。

それに、工藤君の考えそうな事くらい、予想がつくわよ。それくらいわかりやすいもの。あなたの考えることって。」「  
イラッとするようなことをさらっと言う。

本当に、優しいと思ったのはオレの勘違いだったようだ。

「で、その理由って何や？」

じつとりした目でオレのことを見てくる。  
服部、今日、お前、しつこすぎないか？

「えっと…それは…。」

「何や？」

……。

「ねえ、これって永遠ループになりそうなんだけど、終わらせる気は無いのかしら？」

呆れたように、ため息混じりで言ってくる。  
しかも、オレのことを軽く睨みながら。

「そうや！姉ちゃんの予想言ってみてくれへんか？当たってるかもしれへんで！」

予想なら……いいけど。  
当たったら嫌だけど……まあ当たんねーよな？

「いいわよ。  
私思うに、まだ覚悟ができてないんじゃないのかしら？  
愛しの彼女に会う覚悟がね。」

……。  
大体当たってやがる……。

「そうなんか？工藤？」

「……。」

「姉ちゃんに会うのに何で覚悟なんかいるん？  
心配かけたままにしてみええんか？  
ちやうよな。元気な姿早く見せてやったほうがええに決まっとるよな？」

服部…。

もうここまで当てられたんだ。

言っちゃまうか。

「蘭がオレを見たら、涙を流すと思う。」

何度も見られているとはいえ、こんな姿で「大丈夫、元気だよ！蘭姉ちゃん！」なんて言ったら…。

自分で言うのもなんだけどオレの姿は『大丈夫』な姿じゃないと思う。

体中包帯だらけ、点滴もしていて、今は外してるけど呼吸器まであり、見て『大丈夫』だと思う奴はあまりいないと思う。

もし蘭がこんな姿でそんな事を言ったら…

オレだったら、きつと…。

それにきつと…あの蘭だから…。

「もう、見たくねーんだ。蘭の涙を。」

わかってるからこそいるんだよ。その覚悟が。

他人の事でも自分の事のように、背負い込んでしまっ、あの優しい性格だとな。

だから、そんな優しいやつに会ったって、ためらっちゃまうっていうか…。

コナンとして、蘭が工藤新一のことが好きだって何回か聞いたこと

がある。

本人の口からも、何回か。

蘭がそんな風に思ってくれているらしい。  
だから、きつとまた見ることになる。

オレのせいで何度も流させている、あの涙をな。  
だから…

「オレが悪かったわ。もうノロケは止め。

もうええからちつこい姉ちゃんに早よ、何聞くんだけ知らへんけど聞いて、答え教えてもらえや。」

さっきの灰原と同じように、呆れた口調で言う服部。

オレが悪かったからノロケは止めるって…。

ノロケなんかじゃねーし、呆れられたのか？オレ。

「呆れられたのよ」

グサツとくることをさらっと言うなよ。

んにしても、灰原の言葉って結構容赦ねーよな。

ドSって感じがプンプンするっていうか…。

まあそんなのいつものことか。

「さっき聞くことは聞いたよな？じゃあ、あの話の続き頼むぜ？灰原」

「ええ」

## 病院の中で part 2 (後書き)

こんにちは！

今回やけに（無駄に？）長いですね…。

えっと…、まず始めに訂正です。

あらすじのところ、ガツシユのキャラは出さないってことを書いたのですが、次回、出て来ます。

回想のシーンになって、哀ちゃんがアメリカに留学してたころの話で。

そこを訂正です。

それと、新人戦が6日から8日までの3日間あるので、そのうちのどれか1日以上、更新します！

「きのこにしては珍しいじゃない。そんなに早く更新するなんて。」

おお！本編に出てくるか未定の園子！！

うん、もうちょいでテスト2週間前になってまた更新できなそうだからね。

「ちよっと！出てくるか未定ってどういうことよ（怒）」  
ではまた次回ノシ

## おもひで part 1

「あれは私が9歳の時…まだアメリカに留学していた時のこと…。」

≡ ≡ ≡

アメリカの小さな田舎町

「おい、この辺に宿はあるか？」

1人の青年が話しかけてきた。

髪の毛は重力に逆らって立っていて、漫画でよくあるような見事な銀髪。

この前会ったジンとは違く、少し明るい感じの色。

「この辺に宿のようなところは一軒もないわ。

あなた、旅の人？」

「ああ、そうだ。」

旅の人…。なら…

「旅の話をしてくれるのなら、家に泊めててもいいわよ。」

旅の人なら、全然覚えて無いけど、私の生まれた国、日本の事も知ってるかもしれないし、

お父さんやお母さん、お姉ちゃんの事も知ってるかもしれない。

この前ジンに聞いても、何も教えてくれなかったから…。



「ならそれで頼む。」

表情も口調も全く変えないで言ってくる。

ジン程じゃないけど冷たい目をしている……。でも、なんだかジンに似た感じの人。

似てるだけだろうけど。

「家に案内したいところなんだけど、これから買い物なの。  
地図を書くから、後で来て。」

そう言って、紙とペンを取りだそうとすると、

「いや、その必要はない。」

3時間後、お前の家に行く。」

と言い、私に背を向けた。

「私の家、わかるの?」

「人の家くらい、普通すぐ見つかるだろう?」

当たり前のように、そして少しバカにしながら言う。

普通ならイラッと来る事だけど、今、私の中は『?』でいっぱいになっている。

すぐ見つかるものなの?って。

しかも、3時間後くらいに来てと言おうと思っていたら、私の考えを読んだかのように3時間後に行くって言われたし。  
こっちはたまたま…よね？

でも、わかるって言ってるんだから地図書いたり、場所教えたりしなくていいのよね…？

「じゃあ、あなたの名前は？  
私は宮野志保よ。」

「オレはデュフォーだ。」

「そう…。ありがとう。」

そう言うと、デュフォーは今度こそ私に背を向け、すぐにどこかへ行ってしまった。

私に残った謎は2つ。

1つ目はここから10分くらいの所にある私の家をどうやって見つけるのか。

2つ目はあんなぶっきらぼうで愛想の全くない人が旅の話聞かせてくれるのか。  
ということ。

その事をずっと考えながら、私はスーパーへと向かった。

## おもひで part 1（後書き）

こんにちは。きのこです！

早速ガツシユキャラが出てきました！その名はデュフォーー！！哀しい過去の持ち主なのです。

コナン「哀しい過去？」

気になる方は金色のガツシユ24巻を！

元太「『おもひで』って何だよ？『おもいで』じゃねーのかよ？」

哀「『おもいで』は『おもひで』の現代仮名遣いなよ。」

元太「現代仮名遣いつてなんだ？」

光彦「さあ？」

それと、今日から2週間ほどの間、更新できないのです。

歩美「どうして？」

テスト2週間前だから…。

今回のテストは真面目にヤバいので…m( \_ \_ )m。  
ではまた次回ノシ

## おもひで part 2 (前書き)

大変お待たせしましたm(\_\_\_\_\_)m  
留学しているとはいえ組織の監視がそんなにあまいのか、そこはス  
ルーでお願いします。

## おもひで part 2

「じゃあ、日本にも行ったことがあるのね!」

あの後 あれからちょうど3時間後、デュフォーは私の家に来た。

そして、2人で夕食を食べた後、以外にもすぐ旅の話 시작했다。

テレビのニュースが、BGMになっている。

デュフォーはまず、日本のことから話し始めた。

私が日本人だからか、そこから話してくれた。

「ああ。一度だけな...。」

「1人で行ったの?それとも、誰かと一緒?」

「古い友人と行った。」

そう話すデュフォーはあまり顔に感情を出さないものの、

悲しげで、どこか遠くを見ているようだった。

志保は、聞いてはいけないことを聞いてしまったと思い、とっさに話を変えようとした。

「じ、じゃあ、観光は？どこに行ったの？」

「観光はしていない。モチノキ中学校からモチノキ空港に行つたくらいだ。」

え？モチノキ？

いつだったか、ニュースで聞いたような気がする。

確か、謎の巨人が現れて、光の竜と共に消えていった場所…。  
気になって何度も調べてみたけど、その実体は明らかになっていないらしい…。

「もしかして、行つたのって今年の春？」

気になったから聞いてしまった。

でも、もう1人の私は聞くなつていつていた。関係ない世界だからって。

「そうだ。だがもうすんだ話だ。お前には関係ない」

突き離すような言い方。

関係ない もう1人の私が言ったとおり、私には関係のない世界…。  
それをデュフォーは知っているんだ…。

聞いちゃだめなのかな？

そうは思っても、聞かずにはいらなかった。

「お願い！私、あの時のこと知りたいの！いくら調べてもわからない…。」

あなたは知っているんでしょう？お願い、教えて！」

思い切って聞いてみた。

すると、

「なぜだ？」

と逆に聞き返された。

？

「お前、頭が悪いな。なぜ知りたかと聞いているんだ。」

イラッとしたけど、理由を言えば教えてもらえるのかもしれない。

苛立つ気持ちを抑え、出来るだけ冷静に、平然と答えた。

「光の竜も巨人も、どこからか急に現れ、姿を消した…。

あれはCGかもしれないという説もあるけど、

そうじゃなかったら本物 異世界の生き物なのかもって思えてきて…。

でも、そんなことあるはずないって 信じられなくて…。

私、謎を謎のままにはしておきたくないの！」

冷静に言っているつもりでも、今を逃したらもうチャンスは無いと思うと感情的になってしまう。

ちゃんと理由を説明できているか不安になる。

1分くらいたってから、デュフォーは口を開いた。

「異世界の生き物は信じられない、そう言ったな。」

無表情のまま言うデュフォー。言葉にも感情が入っていない。

「…ええ」

私は考えながら頷いた。

「でも、世界は他にもあるって、信じたい気持ちもあるの。」

デュフォーは私の表情をじっと見ている。



そんなに表情のない目で見られると、言うてはいけないことを言うてしまった気になる。

でも、そんなことは無かった。

私から視線をふと反らすと、デュフォーは口を開いた。

「誰にも言わないと誓えるなら、話してもいい。」

この時のデュフォーの目は、さっきまでとは違い、懐かしげで寂しげで、少しだけ優しい色をしていた。

## おもひで part 2 (後書き)

お久しぶりです…。

とつくに2週間過ぎてますね…。大変お待たせいたしましたm(

ー)m

「毎度毎度待たせ過ぎだろ」

はい…。分かってはいるのですが…。

今日中にもう1話投稿する予定なのでお許してください。

でも、『予定は未定、決定に非ず』という言葉覚えておいて下さい。

## おもひで part 3 (前書き)

原作とは違い、哀ちゃんは組織に両親のことを聞いていない設定です。

あと、デュフォーはデュフォーじゃないのでオリキャラとでも思っておいてください。

## おもひで part 3

デュフォーはあれから、色々と話してくれた。

決して私と目を合わせることは無く、どこか遠くを見つめながら。

デュフォーの話してくれたことは、現実のこととは思えない内容だった。

- ・この世界とは別に、『魔界』があるということ。

- ・この『人間界』で1000年に一度、魔界の王を決めるために100人の『魔物の子』が送られてきて、パートナーの人間と共に闘うこと。

- ・魔物の子は『魔本』とともに送られてきて、魔本が燃えると王の資格が失われ、

最後まで残った者が魔界の王になること。

- ・デュフォーはそのパートナーの1人だったということ。

- ・さっき言っていた古い友達とは、その魔物のことだということ。

そして、

・あの巨人はファウードと呼ばれている魔物だということ。

・デュフォーはそのファウードの中にいたということ。

・光の竜は、ある魔物が出した技だということ。

話し終えたデュフォーは「信じるか？」と聞くように、私を見た。

私は迷うことなく、すぐに頷いた。

デュフォーの話してくれたことは、現実のこととは思えない内容だった。

それは嘘じゃない。

でも、私は何故だかすぐに信じる事ができた。  
彼の目が、嘘をついていると思わせなかったのも、理由の一つだと思う。

「ありがとう、話してくれて」

私がそう言うと、デュフォーはそっぽを向き、

「別に……。礼を言われるようなことはしていない」  
とつぶやいた。

この時も無表情だった。

少しの間、沈黙する。

ニュースキャスターの声だけが聞こえる。

その他は何の音もせず、それだけが静かに響いている。

この沈黙を破ったのは、私だった。

「私の両親や姉に、会ったこと無いわよね…？」

父は宮野厚司、母はエレナ、姉は明美って言っただけど…」

会っているわけがないと思いながら、わずかな可能性に賭けて聞いてみる。

私の質問に、デュフォーは私の目を見て、やはり無表情のまま答える。

「残念ながら、会ったことは無い。」

「そう…。」

『残念ながら』は全然残念そうに聞こえなかった。

でも、私にとってはとても残念なことで、その気持ちを抑えきれず、俯いた。

そんな私をデュフォーは見ていたが、

「今、どうしているかを知りたいのなら、教えてやれないこともないが。」

と急に言った。

勿論、その言葉に感情は入っていない。

私はその言葉話理解するのに、少し時間がかかった。

「会っていないのに、知っているの？」

デュフォーは静かに首を横に振る。

「じゃあ何故…？」

少し迷った表情になり、私の顔を見て、また目を反らしてから口を開く。

「オレにはある能力がある。アンサートーカーという、能力が。」

その能力でほぼすべてのことが分かるんだが…。信じられる奴なんて、いないだろうな」

また、目が寂しげな色になる。

ここで、私は思い出した。

デュフォーは時間どおりに、地図も何もなく私の家に着いたことを。

デュフォーは私の両親と姉のことを知らない。でも、分かるんだ。

「私は、信じるわ」

そのことを思い出した瞬間、私の口は勝手に動いていた。

「だから、あなたの分かることを教えてほしいの」

後で後悔することを知らずに。

デュフォーは、信じたくないことは信じないで欲しいと前置きして、話し始めた。

その話は、お姉ちゃんは日本の学校で組織の監視付きだけど普通に暮らしているということ以外、信じたくないものだった。

思ってもみなかったことを平然と言われたから、聞いたことを後悔した。

そして、私はデュフォーに言われたとおり、信じないことにした。

ちょうどその話が終ったとき、ニュースキャスターの人が



「A bulletin!! 《速報です!!》」  
と言い、

画面がフランスの、隕石の落ちた後みたいな所の映像に切り替わった。

デュフォーはその画面にくぎ付けになっている。

画面から目を離れたかと思うと、

「日本に行く」

と呟き、帰り支度を数秒で済ませ、礼も言わずに出て言った。

我が家のリビングで、ニュース終了を告げる音楽だけが、哀しく響いていた。

ミ  
ミ  
ミ  
ミ

### おもひで part 3 (後書き)

こんばんは！書き終わりました

「そういえば、あの鬱陶しいの、最近見てねーな…」

「そんなのもいたわね。」

あの鬱陶しいのなら鬱陶しいから退場してもらったよ

「そう。いないとここまで違うものなのね。」

「だいぶ静かだよな！」

ではまた次回ノシ シ

## 意外な一面

「よーするにオメーは、オレがその…アンサーターカーだっけになったって言いたいんだな？」

灰原はそれを言いになわざわざ来てくれた事はわかるけど、

超能力の存在を灰原が本気で信じているなんて、意外にも程がある。

答えはわかりきっているが、確認の意味も込めて、聞いてみた。

「ええ」

やっぱり…なんだな…。

そう答えた灰原を見て、服部が意外そうな顔をした。

「姉ちゃんがそんな非科学的なこと信じるなんて珍しいやないか」

灰原は、少し表情を曇らせ、肩をすくめる。

「あそこまでやられちゃ、信じざるを得ないじゃない。

彼の言っていたことは、後で確認をとったら本当のことだったし…。」

『彼の言っていたこと』は灰原の両親の死の事で、確認をとった相

手は、組織の誰かだろう。

でもそんなあっさり確認をとれる人なんて組織の中にいるのか…？

そんな事を考えていると、灰原はさつと表情を変え、荷物を持った。

「じゃあ私、帰るわね。用は済んだから。

彼女、まだ来ないわよね？」

「…ああ」

「それじゃ。お大事に」

心にも無いことを言って、さつと病室を出ていく灰原。

その後ろ姿を見て、ドアを閉めながら服部が呟いた。

「ホンマに信じとるんやな…」

「…そうみたいだな」

灰原はアンサートーカーという超能力の存在を信じ、

更にはオレがそんな奇妙な能力を持ってしまったという事も信じて疑わない。

こんな非現実的な事を本気で信じている灰原を、服部も意外に思っているようだった。

しばらく沈黙が続いた。

そして、不意に病室のドアが、勢いよく開いた。

そこに立っているのは、オレが今一番会いたくて、一番会いたくない奴。

蘭

## 意外な一面（後書き）

こんにちは

約3週間ぶりの更新ですね。お待たせしました。

「やっと私の出番が来るのね」

あ、はい。蘭も待ってたんだね。お待たせしました。

「てか灰原の出番今んとこ一番多くねえか？」

それは気のせいだよ

これからまた少なくとも3週間ほどの間は更新できません。

またテストの時期が来てしまい…。

しかも合唱コンクールとかいう行事があるせいで練習とかいうものもあり…。

この時期を過ぎてもなかなか更新出来ないと思いますが、

これからもお願いしますm(\_\_\_\_\_)m

感想、評価、駄目だしなど、お待ちしております！

あと、題名をこう変えたほうがいいとか、そういう意見も待ってます！！

バレた！？

蘭と医者に来てから、色々あった。

予想通りの事も起きたし、医者には記憶障害がないかの検査（単純な計算とか、自分の名前、年齢、家族、両親の名前とかを聞かれたぐらいだけだな）をされた。

小学１年生なのに、事故の時頭を強く打ちつけたことが意識不明にまでなった原因とも聞かされた。

そして、意識が戻った今、もう何の心配もいらなく、オレの周りを取り巻いていた医療機器の数々は無くなった。

にしても、両親の名前を聞かれた時はマジで焦った。

母親の方は江戸川文代って事になってるけど、父親の方はまだ決まってる無かったからな…。

そこで蘭が

「コナン君の両親、外国に行っていて、コナン君は家で預かってるんです。」

それで、あまり家族のこと話すの好きじゃないみたいで…」  
って言うてくれなかったら、面倒なことになっていた。

今はあれから3時間が経ち、日が暮れてきた。

服部はまだ居たかったようだが、明日学校だからと和葉ちゃんに連れられて帰って行った。

この病室に居るのは、蘭とオレの2人。

蘭は、さつきからずっと窓の外を見ている。

すると、サツとカーテンを閉め、こっちを向いた。

「コナン君…」

「なあに？ 蘭姉ちゃん？」

蘭はじつとオレの目を見ている。

いつになく真剣な顔…。

この顔は確か、前にも…。

そうだ、正体がバレそうになって、問い詰められるときは決まって…

「コナン君は新一よね？」

やっぱりな…。

「違うよ。僕が新一兄ちゃんなわけないじゃない」

このセリフ何度言ったことか…。



「私ね…悪いと思ったんだけど、コナン君のケータイ見ちゃったの。2つ同じものがあつたから、どちらか間違えて持って来たものかもって思つて」

！？

「でも違つた。

片方はコナン君、あなたの物だつた。もう片方は新一の。何で新一のケータイをコナン君が持っているか　コナン君が新一だからよね？」

…。

「メールとか、着信履歴とかも、悪いと思つたけど見ちゃつたから、間違い無いはずよ」

マジかよ…

「何か言いなさいよ！新一！！」

ヤベ…。

ここはどう誤魔化せば…？

…あ、なる程。隠す必要はもう無いのか。

「ああ。そうだよ。江戸川コナンは工藤新一だ。今まで内緒にしてて、ごめんな…。」



バレた！？（後書き）

こんばんは

お久しぶりです、きのこです！！

もう3週間は過ぎてますね…。お待たせしました！

コナン

「間があき過ぎなものそうだけど、何なんだよ！この展開！！」

哀

「工藤君、どうして正体をバラしちゃったのかしら？」

蘭

「なんで今まで隠してたの…？新一…」

平次

「何でオレがいなくなってからそんなことしたんや！？工藤！！」

コナン

「オレは聖徳太子じゃねーんだよ！！」

色々と次回判明しますので^^

次回もよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1320n/>

---

超能力者コナン

2011年3月25日18時43分発行